再び戻ってきた同一集団か、あるいは先の集団と関係（接触）のあった集団であった可能性がある。

このことから集団間の関係として、石器や石材という「モノ」の交易だけでなく、情報や人の交換という形での交流のあったことを考えることができる。

3．蒲沢山遺跡出土石器について【参考資料】

蒲沢山遺跡は、JR 仙山線愛子駅から北へ約 2.5 km、仙台市立大沢中学校の北側に位置していた。調査は区画整理事業に伴う事前調査として実施され、現在は赤坂ニュータウンとなっている。

遺跡は、愛子盆地北側の七北田・国見丘陵の西南端を流れる広瀬川水系の一つである芋沢川の支流赤坂川左岸の丘陵上にある。遺跡内の標高は 140～230 m 程である。野川遺跡からは直線距離にして約 8 km程のところである（第1図）。

1983～84 年にかけて、旧宮城町教育委員会によって発掘調査が行なわれた。調査面積は約 20,000 m²ほどである。調査の結果、縄文時代前期初頭の竪穴住居跡２２軒と多数の土坑が発見されるなど、早期末から前期初頭の集落跡であることが明らかになった。

出土した土器としては、早期末の素山II式に比定される条痕文土器・表裏縄文土器や船入島下層式、前期初頭の上川名II式・大木１式に比定される羽状縄文土器などがある。石器は 600 点以上出土しているが、その中に今回参考資料としてあげた局部磨製石斧・片刃石斧といった、草創期のものと考えられる石器がある。珪質頁岩の大型剝片の接合資料は、第 71 図のとおり、直立した状態で一括出土している。周辺には、15～30 cm大の礫がみられた。この石器に伴う明確な掘りこみは検出されなかった。所属する時期については、土器との共伴関係がみられなかったことから縄文時代早期以前のものとしておきたい。

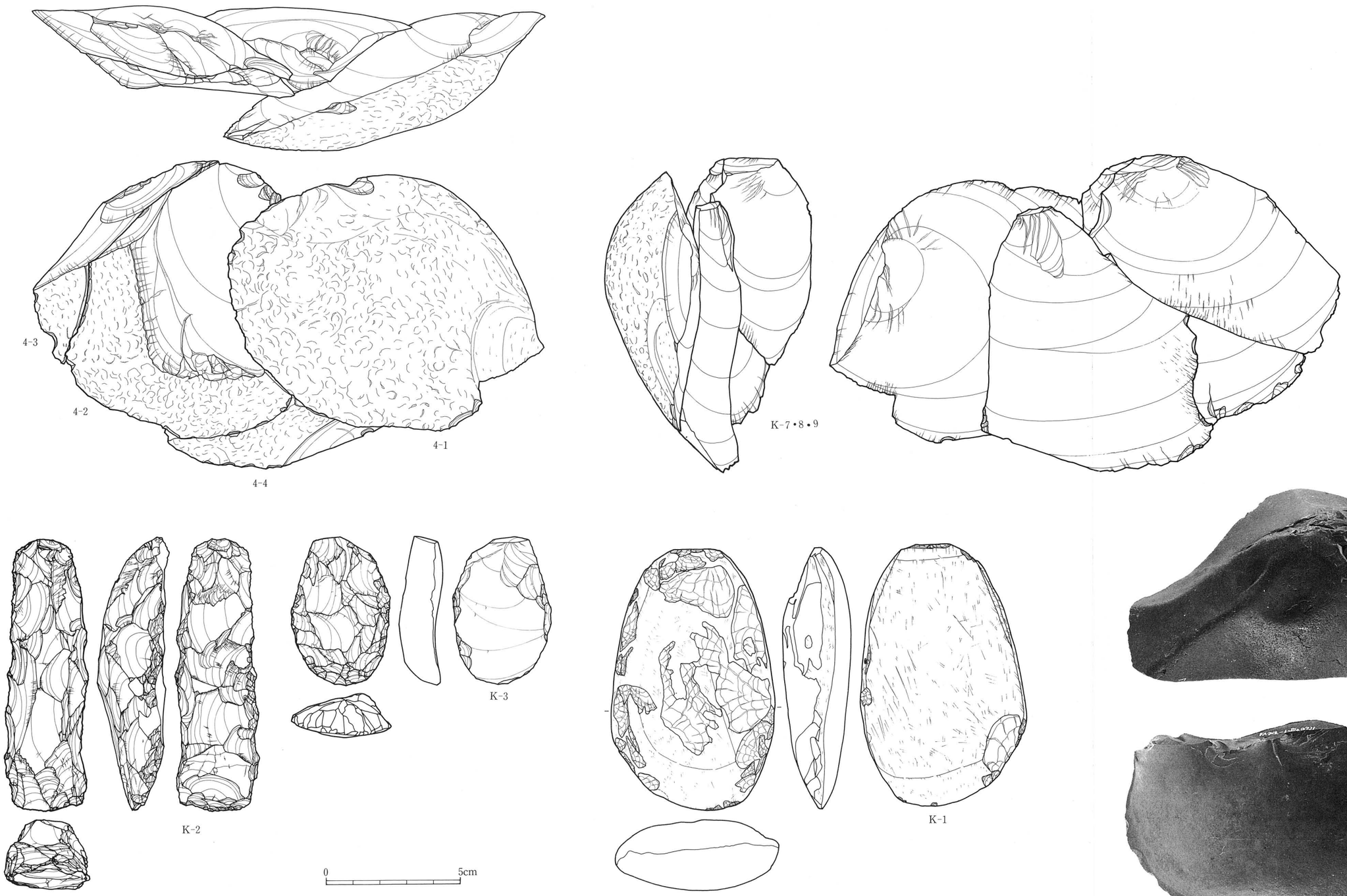
大型剝片接合資料（K－７・８・９）　打点を左右に移動させて剝片を剝離している。背面に自然面を大きく残す剝離の初期段階のものである。原石個体の形状復元が可能な資料で、かなり大きな礫であったと思われる。調査時周辺には剝片はなく、分割されたうえで持ち込まれたものと考えられる。

片刃石斧（K－２）　裏面は平坦で、縦断面形は片刃形を呈する。刃部は表裏面ともに基部方向への加工により作り出されている。長さ 100.8 ㎜、幅 27.7 ㎜、厚さ 23.8 ㎜を計る。

エンドスクレイパー（K－３）　基部に打面を残している。刃部は弧状を呈し、急角度に調整されている。裏面はほとんど加工されていない。長さ 55.7 ㎜、幅 36.2 ㎜、厚さ 13.3 ㎜を計る。

局部磨製石斧（K－１）　刃部が丸みをおびた両刃の石斧で、最大幅は刃部近くにある。両側辺は研磨によりわずかに平坦になっている。表面は全体を粗く打欠いたのちにタテ～ナナメ方向に研磨している。裏面は刃部付近を中心にタテ～ナナメ方向に研磨している。長さ 97.2 ㎜、幅 60.3 ㎜、厚さ 24.9 ㎜を計る。

第71図　蒲沢山遺跡剝片接合資料出土状態



第72図　蒲沢山遺跡出土石器